

2016年1月2日NHKラジオに、のど自慢の時代背景～歴史の特集番組で、父の歌声と(娘)私のインタビューが放送されました。偶然、ジャズ専門新聞(EIKOが2005年度日本ジャズヴォーカル賞：優秀歌唱賞受賞)よりエッセイを依頼され、父とEIKOのヒストリーに触れさせていただいた記事です。

JazzWorld紙 2016年1月号 掲載

今年ラジオ放送が90年

戦後の焼け野原から復興の象徴ともいえる「NHKのど自慢」が2016年1月19日で70周年になる記念の年だそうで、ラジオ～テレビと現代までに至り驚異です。第1回全国チャンピオンの「床屋の英ちゃん」こと(故)父の取材をしたいと連絡がきました。父の没後、今まで眠っていた大量の資料が出てきて「これ程あったとは!!」と驚かれ、亡くなる迄多くを語らなかった父のルーツが明らかになりました。絶望的な日本の時代を反映するかの様にスタートした一大イベントの番組、全国民の少しでも豊かな生活を～心の解放を～と、父も同じ想いで、のど自慢に出たのではないだろうか!?みんなの想いを背負って夢を叶え、国民的ヒーローとなった父はNHKの専属歌手となりました。しかしながら「東京へ行って、のど自慢で日本一になる」と言い切って、故郷兵庫を出たという。それは天才であったに違いない。独身時代の父の全盛期を知らない娘の私は、歌に興味なく歌う事が大嫌いで、父の血のかけらも受け継いではいなかった(!?) OL時代オルガンに魅せられ、小曽根実氏の追っかけをし、プレイヤー、講師の道に進み、ある時、演奏中に歌のリクエストをさ

新春随想

れ断り続け、又ある時「歌うかディスクジョッキーを」と要望され、仕方なく恥じない歌を勉強する為、マーサ三宅師のスクールに辿り着き、運命の歌への始まりとなりました。初めて師匠にお会いした時「あなた床屋の英ちゃんの娘だってね。やっぱりDNAね」と…なぜ歌の道に導かれたのか不思議でした。歌って表現する事は自分との戦い。歌は自分を見つめる精神を養い、歌に人生を教えられました。師匠の前歌でデビュー、講師活動、ジャズワールドの優秀歌唱賞と人生の大きなご褒美を頂き、魂で歌う父のDNAに導かれた(!?)であろう、歌で伝える事が天命と思えるのは摩訶不思議であります。



瀬上英子 (EIKO)

NHKラジオ第一AM特集番組「焼け跡にラジオは鳴った」2016年1月2日19:20～放送されます。

ジャズ専門新聞・ジャズワールド紙に度々エッセイを依頼され、4月号に掲載された記事です。

テーマが無いので、恥ずかしながら「歌うことが好きでなかった」部分などさらけ出し、歌う心を大事に～自己表現できる！とエールを送れたなら！？の思いで制限枠の範囲で書きました。

●本音が出せる音楽の力

表現力で人の心を魅了する音楽は心に癒しと感動を与えてくれます。OL時代オルガンに魅せられ、楽しむ側から～表現する側になりましたが、歌の道に到っては想定外。それは人としゃべれない、気持ちを伝えられない、目立ちたくない、閉じ籠りの生い立ちがありました。そんな心の葛藤をどう乗り越えたか(!?)。人は誰でも押し殺している激しい感情を持っています。その心の機微（悲しみ憎しみ・喜びや愛情etc.）を歌の中で表現することで、自分をさらけ出し、説得させたいという強い気持ちが本気で唄う～ふだん欲がない

EIKOのエッセイ

私を「別人28号」と化し、歌を通して本音を見せられる。表現する側が絶対伝えたい、と心を込めなければ情熱は伝わらない。気が付けば上がっている場合じゃない！“人生の大逆転”歌い手になったことで、歌に人生を教えられました。3月21日はデビュー記念日。数えてみたら30年目のスタートなのです。魂の叫びを伝えられる～感性豊かでありたい！感じる事が人へ動く～ことを感動と言うのですから。

文・EIKO

切り取り線 - 切り取りせん - 切り取り線

ジャズ専門紙“ジャズワールド”に、「EIKO 30周年記念ディナーショウ」の記事がファンからの投稿により掲載されました。

jazz

(10)平成28年10月1日

On Stage

●EIKO 30周年記念ディナーショウ at 亀戸・アンフェリション

7月31日、亀戸・アンフェリションにて「EIKO 30周年記念ディナーショウ」が開催されました。

カラオケ配信のEIKOオリジナル曲を数曲持っている幅広い音楽性から、歌謡関係の方面からも「歌唱力アップの為のボイストレーニング講座」の依頼を受け講師も勤めておりますが、当日は編曲者の川端マモル氏をゲストに招き、「トークショー」で勉強会のカリ



キュラムを加えての進行でした。

ショウでは江草啓介(p)大津昌弘(b)近藤和紀(ds)川村裕司(sax)のカルテットをバックに、デビュー当時から応援されている方々のリクエストでRoute66、キャラバン等、交え数々のスタンダードジャズが熱唱されました。

ピアノの弾き語りでは「川の流れるように」をまったく違うスタイルで唄うパフォーマンスで意表を突き、またアンコールの「この素晴らしき世界」のエンディングで高音域が出なくなるまでの挑戦で遊ぶ等、会場を沸かせる楽しくもエンターテインメントなショウであり、デビュー当時の真っ赤な可愛らしい衣装を選んで着たのも、おちゃめなEIKOさんの一面が印象に残る、まさに記念のディナーショウとなりました。

※写真①EIKO②川端マモル氏(左)とEIKO

文・Well

